

ハマナスの開花特性と育てかた

～開花時期のコントロール～

梶 勝次・林 善三

はまなす国体に向けて

昭和64年に本道で開催される「はまなす国体」は、1月28～31日と2月19～22日（冬季大会）、9月3～6日（夏季大会）、9月17～22日（秋季大会）の日程で、42種目の競技と「カーリング」など4種のデモンストレーションスポーツが、全道43市町村の96施設で行われる。

この「はまなす国体」において、ハマナスをどのように飾花したらよいか、またそのためにはどのように育てて管理したらよいかを明らかにするため、筆者らは開花時期のコントロールなどいくつかの試験を進めてきた。

これらの試験目的は、大きく4つに分けられる。すなわち、①ハマナスの開花を中心とした樹種特性を明らかにし、②開花時期をそれぞれの会期に合わせてコントロールするにはどのようにしたらよいか、③またどのような材料（苗木）を用いたらよいか、④さらにそれらの材料はどのようにして育て、管理したらよいか、を明らかにすることである。ここでは、これまでの試験結果を中心にハマナスの育てかたについて述べる。

ハマナスは個体によって生育特性がいろいろ異なる

ハマナスは、これまで原生花園などで自然状態の花や果実を楽しむことが多く、品種改良がほとんどされていない。したがって、樹形や花のつきかたに個体による大きな違いがみられる。樹形は一般に株立ちの性質があり、萌芽幹が多く発生し、ひこばえによる萌芽（根萌芽）も多い。

自然状態での樹高は、20 cm（宗谷、ベニヤ地区）前後から50 cm前後（石狩浜）、あるいは100 cm（別海野付）とさまざまである。これらは生育環境の違いによるものと考えられ、栽培した場合では2 m前後にまで生長する。根をみると、主根が不明瞭であるが発達していて根が広く分岐し、かなり深くまで伸びるが、細根は一般に少ない。

主にタネでふやす

種子の採取と精選は、果実が赤くなったら採取し、果肉を水洗除去した後、日陰で生干しを行う。種子は、乾きすぎをきらい、乾燥しすぎると発芽に2年を要し、発芽能力を失うこともある。そのため、種子は保湿低温条件で貯蔵する。

種子のkg当たりの粒数は、約130,000であり、発芽率は約10%である。苗木は、一般に種

子によってふやし、まきつけ量として8～10g/m²を標準とする。まきつけ当年の秋期苗高は、10～30cmである。なお、とりまきが確実であるが、春まきを行う場合は、種子が吸水しにくいので、発芽促進のため低温湿層処理を60日間以上行くと効果がある。

このほか、株分け、さし木、根ざしでもふやすことができる。

新梢の先端に花がつく

ハマナスの花は、新梢が伸びてその先端に咲く（写真-1）。花芽が分化するための温度条件など、花芽分化に関する観察例はほとんどなく、後記のように、花期が5月から10月までと非常に長いことなどから、特定の時期に一齐に花を楽しむことは、現在のところ困難である。

新梢1枝当たりの花の数は、個体や生育状態により異なり、1～数花である。一般に、幹径が太く樹勢の良い萌芽幹から発生した新梢においてのみ、1枝に多くの花がみられる。

開花は7月がピーク

開花時期は、生育している環境によって異なり、道南地方では一般に5月下旬、道央で6月上旬、道北で6月中旬頃から開花がみられる。いずれの地方でも10月下旬まで花がみられるが、最盛期は7月上～下旬である。しかし、個体ごとにみると、早咲きのものや遅咲きのもの、あるいは四季咲きのものがある（図-1）。

このように、着花期間が長いという特性があるが、国体の開会中に飾花するには、何らかの方法で開花の最盛期をその期間にあわせてコントロールする必要がある。

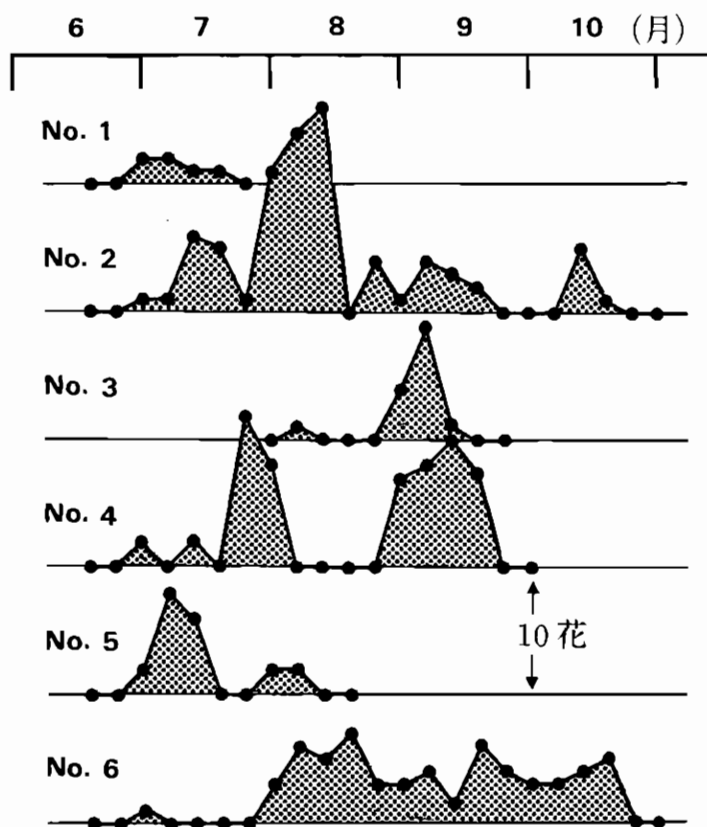


図-1 個体別にみた着花量と開花時期

材料は規格苗，昭和61年春植え，同年秋調査

1つの花が咲いている期間は約2日間

1週間ごとに開花状況を調べたところ、前回つぼみであったものがすでに落花しているものが多くみられた。そこで、それぞれの花について苗畑と温室内で毎日調べたところ、1つの花の花弁が開いている期間は2日前後であった。

いずれにしても、花芽が確認されてから1～2週間後に咲き、すぐ散ってしまう。そして、別の花芽を順次形成するという繰り返しを行う。なおこのとき、つぼみに赤い花卉の一部をのぞかせている期間が長く、花は1日で散ってしまうものも多くみられた。

若齢ほど着花量が少ない

ハマナスの花は、まきつけ当年にみられるものが稀にあるといわれる。この試験でも、まきつけ据え置き苗(2年生)で着花を確認した。しかし、床替え2年生苗ではほとんど着花がみられず、2回床替え3年生苗でもきわめて稀にしかみられないし、また1株当たりの着花量が1～2花と少ない。

表-1 産地別、苗齢別にみた生長と着花本数率

産地	昭和61年5月				昭和61年10月			
	苗齢 (年)	樹高 (cm)	根元径 (mm)	幹本数 (本)	樹高* (cm)	根元径 (mm)	幹本数 (本)	着花本数率 (%)
小清水	2	44	4.4	4.2	59	6.8	5.6	14
石狩	3	46	4.8	4.6	54	7.3	7.6	29
野付	3	52	5.4	4.7	71	8.6	9.5	33
日高	5	48	6.2	10.0	68	8.9	15.0	52
えりも	6	28	5.6	12.0	40	6.9	15.1	71
(規格苗)**		65	7.8	5.5	83	9.3	15.3	81

*：当年発生した萌芽幹の高さは含まず。

**：市販の苗木(樹高60cm、葉張り30cm)。

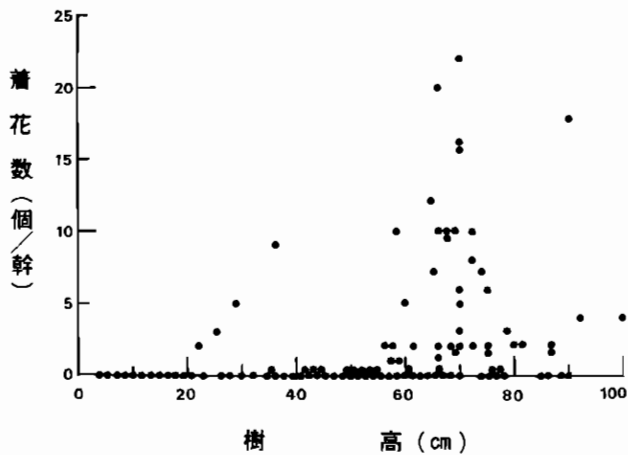


図-2 萌芽幹の樹高と着花との関係

苗齢別にみた着花本数率は、表-1に示すとおりで、苗齢が高くなるにつれて着花本数率とその着花量が増加するといえる。もちろん、育てかたによっても異なり、床替え苗と据え置き苗を比べると、前者は樹勢が弱っているため着花量が少ない。

また、樹勢のよい萌芽幹から発生した新梢ほど着花量が多い傾向がみられ(図-2)、密度別の植栽では疎に植えたものほど1株当たりの着花が多かった。これらのことから、育成に当たっては施肥効果が期待でき、育てる環境として日当たりのよい場所を選ぶ必要があるといえる。

開花を遅らせて9月(秋)に花を多く咲かせる

図-3は、苗木をクールハウス(温度-3℃、湿度83%、道苗組上川地区苗木低温貯蔵庫)に貯蔵した場合の、貯蔵期間別の開花状況を示したものである。この図から明らかなように、貯蔵期間が長いほど、すなわち生育のスタートを遅らすことにより開花時期を遅らせることができた。さらに、植栽後40日前後から開花がみられ、開花のピークは50~60日後にみられた。

以上の結果から、苗木を低温貯蔵することにより、開花時期を自由にコントロールできることが明らかとなった。したがって、飾花したい時期から逆算し、その約50日前から育成を始めればよいといえる。

なお、クールハウスから一定の期間ごとに苗木を取り出し植栽したが、着花時期およびそのピークは、取り出し日とパラレルになっていない(図-3)。これらは、植栽前後とその後の気候条件、主に気温と降水量に大きく影響されるものと考えられ、育成条件により開花時期が著しく違ってくることを示唆している。

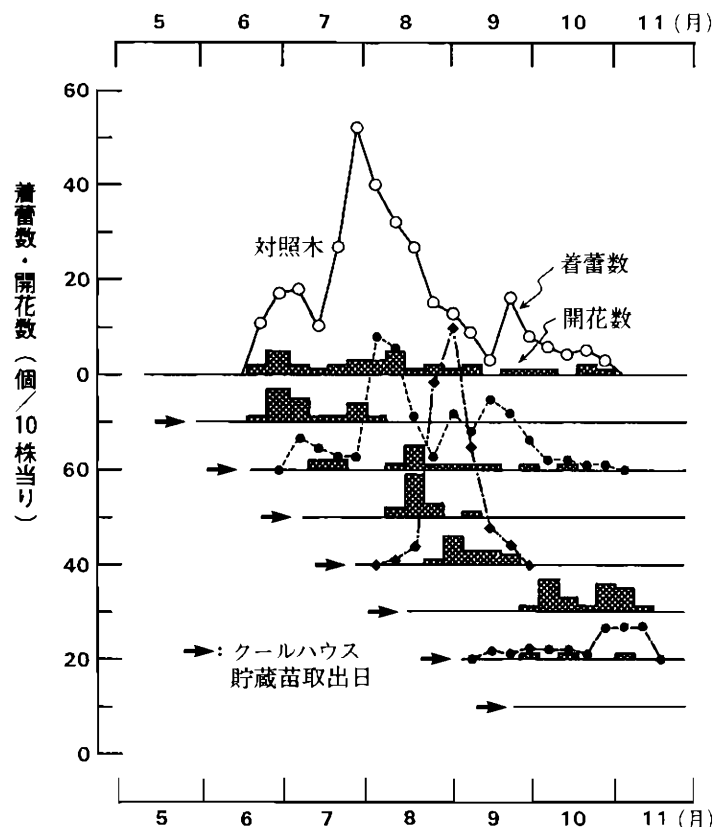


図-3 クールハウス貯蔵苗の開花状況

- (1) 材料は規格苗(樹高60cm、葉張り30cm)
- (2) 昭和61年4月24日クールハウス入庫、同年調査
- (3) 着蕾数は一部についてのみ示した

温室を利用して冬に花を咲かせる

秋に生長停止したものを温室に入れて加温したところ、30～40日後に開花がみられた（写真-2）。これらの結果から、加温開始時期を変えることにより、冬期にハマナスの花を楽しむことができ、その開花時期も自由にコントロールできることがわかった。このときの加温条件として、温度20℃、湿度70%前後で十分と考えられるが、温度が高い場合は開花までの期間が若干早まると予想される。

国体に向けての具体的な作業としては、予め鉢植えして養成したもの（あるいは秋に鉢植えしたもの）を、開花させたい時期の約40日前から温室で育てればよいといえる。



写真-1 ヤエハマナス（ハマナスの園芸品種）の着花位置



写真-2 温室の利用（加温処理）による冬期の着花（昭62、2月）

開花調節は鉢植えで

ハマナスの根は、かなり深くまで伸びていることが知られている。そのため、移植した年度には、根系が十分に発達しないため、開花時期が不ぞろいになり着花量も少ない。したがってより多くの着花を期待するためには、それを期待する当年の移植は避けたほうがよいといえる。やむを得ない事情により移植する場合には、深耕し（40 cm 以上）を行い、根をできるだけ切らないようにする。

また、クールハウスに貯蔵する場合や加温する場合は、確実に開花時期をコントロールするために、予め鉢植えで育てたものを揃い、開花するまで集約的な管理をする必要がある。

整姿・せん定のしかた

ハマナスは、どこの部位、例えば地際から切っても、根が枯れない限りよく萌芽する。この特性を利用して、花つきをよくしたり、望ましい樹形へ誘導することができる。また、ハマナスを用いて生垣を作ることもできる。

せん定の基本は、芽の上部の幹あるいは枝を長く残すと枯れ下がるので、芽のすぐ上で切る。枝のこみすぎは、日当たりや風通しが悪くなり、病虫害が発生しやすい。さらに、花つきを悪くするので、古い枝を中心にせん定する。このとき、どの枝にもよく日が当たるように外に向いた芽の上で切る。また、せん定すると新梢が多く発生するから、枝数をやや少なめにすると短期間でよい樹形に誘導することができる。

花つきを良くする育てかた

花つきをよくするためには、できるだけ日当たりのよい場所を選ぶ。土壌は選ばず、どのような土でも育てることができるが、砂質で水はけがよくさらに有機質の多い土壌で、一般に生育がよい。乾燥に耐えるが、十分灌水すると花つきがよくなる。鉢植えの場合は、樹勢を保つため10号（直径30cm）以上の深鉢を用いることが望ましい。

また、肥料分を好むので、定期的に施肥を行う。施肥にあたっては、チッ素分を少なめにした3要素をあたえる。鉢植えの場合には、毎日灌水し、週1回液肥を与える。せん定の時期は主に秋または早春に行い、必要に応じて随時補完的に行う。

なお、生育期間中（特に開花したもの）の移植は、根系が切断されるため樹勢が急に衰え、その後の着花がほとんどみられなくなるので避けなければならない。

病虫害に細心の注意を

花つきが悪い原因として、日照や肥料不足などによる場合と病虫害に起因する場合が考えられる。ハマナスは、緑化樹のなかで病虫害の種類が多い樹種としてあげられている（上条ら、1983、光珠内季報 No.55）。また、大量に栽培した場合や栽培環境がよくないときなど、場合によっては大きな被害が起こりうる。

筆者らがこれまで確認した病虫害には、褐斑病をはじめ樹液を吸うアブラムシ類、カイガラムシ類およびハダニ類、葉を食べるオビカレハ、マイマイガなどのケムシ、花びらを食害するマメコガネや3mm前後の小さなケシキスイ類、果肉を食べる蛾の幼虫などがあげられる。

病虫害は早期発見と定期的な防除が大切

つぼみが急にしおれたり、花卉の開かないものがよく見られる。これらの原因は、主に病虫害によるもので、被害発生後に対策を講じても、すでに手遅れである。したがって、これらはつぼみの小さなうちから、殺虫剤と殺菌剤を定期的に繰り返し散布し、予防する必要がある。

しかし、葉が食害されてもハマナスは枯れることがないから、薬剤づけにする必要はない。

一般的な病虫害の防除方法としては、早春に石灰硫黄合剤 30 % 液を散布して各種の病虫害を予防し、その後は被害状況を見ながら必要に応じて殺虫剤または殺菌剤を散布する。

花と果実を楽しもう

これまで述べてきたとおり、ハマナスは、新梢が伸びてその先端に順次花芽を形成する。したがって、開花するまで約 50 日間にわたる長期の管理が必要となり、一方では花の寿命が短いことから、そのコントロールが非常に難しい樹種であるといえる。反面、着花期間が長いことから、美しい花と真っ赤な果実を同時に楽しむこともできる。

美しく開花し、実を結ぶ「北海道の花」ハマナスを、昭和 64 年の国体にむけて栽培するためには、樹勢を保つため昭和 63 年の春から定植あるいは鉢植えなどの作業を行わなければならない。ハマナスだけでなく、各市町村の花や木とともに、郷土を花と緑でつつみ、心に残る国体にしたいためである。

(樹芸樹木科)